チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2013 年 12 月 10 日　　(C)河北新報社

むすび塾＠チリ・タルカウアノ

どうする要援護者と車避難

ルール化 共通課題

いのちと地域を守る

【タルカウアノ（チリ）東野滋＝報道部】南米チリのタルカウアノ市で8日、河北新報社と国際交流基金が開いた巡回ワークショップ「むすび塾」では、介助が必要なお年寄りたちの避難と自動車を使った避難についても活発に意見が交わされた。高齢化や車の普及といった社会の変化に伴い、要援護者と車の避難は、太平洋を隔てた両国で共通の重要課題になっている。

（1面に関連記事）

チリ側の参加者は、要援護者の支援について試行錯誤している現状を説明した。ある町内会は高齢者の人数や住所のほか、避難する際は手助けが必要かどうかを把握する責任者を決めていた。10月の避難訓練時、避難路を示す標識の見やすさをチェックしたり、車いすの人が避難する際の問題点を調べたりした地域もあった。

東日本大震災の語り部として参加した宮城県南三陸町の農業後藤一磨さん(66)は、「家族がばらばらの時間帯も多い。隣近所や職場の人たちで助け合うためのネットワークをつくってはどうか」と勧めた。

震災の沿岸被災地と同様に、チリでも車避難は渋滞と背中合わせだ。高台まで遠い平野部にあるヌエバ・ラス・サリナス町内会長のファン・マルティーネスさん(55)は「みんなが車を使えばすぐに動けなくなる。10月の訓練は徒歩だったので、実際の避難時にどのような事態になるか予測できない」と不安を口にした。

進行役を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は、日本では震災を経て、国が条件付きで車避難を認めたことを紹介。「高齢者を運ぶ車を決めるなど、地域で避難時の車利用に関するルールが必要だ」と助言した。

要援護者の支援と車避難など、両国の共通課題の解決策を探ったむすび塾＝8日、タルカウアノ市